

国内経済情勢

概 観

設備投資の鈍化などから春需期のわりには荷動きが鈍いが、輸出はかなりの増勢を示している。このところ鉱工業生産はおおむね横ばいに推移しているが、出荷の水準が低いことから製品在庫は増加を続けている。もっとも、その増勢はやや鈍化ぎみにうかがわれる。

卸売物価は引き続き弱含みに推移しており、一方、3月の消費者物価も前月に続き微落した。

金融機関の融資態度は、ようやく積極みを帯びつつあり、銀行貸出は引き続き顕著な増勢を示している。このような状況下、企業金融面では、既往設備支払要資の大きい大企業などにはなお繁忙感も残っているが、需資の充足率はしだいに高まり、手元流動性の回復もみられはじめている。

2月の国際収支は、貿易収支の好調に加え外人投資の流入増から大幅な黒字となった。外貨準備は2月に続き3月も月中590百万ドルの著増を示した。

生産はおおむね横ばい

鉱工業生産(季節調整済み、前月比)は、1月減少(-0.5%)のあと2月は0.1%の微増にとどまり、原計数の前年同月比では+7.5%となった。財別には、船舶のほか、軽・小型乗用車等の耐久消費財がかなり増加したが、一般資本財(農業用

機械、土木建設機械)、非耐久消費財(紙、ポリエチレン製品)が減少し、生産財(電子部品、塩ビ、パルプ)も停滞を続けた。なお、生産の動きを3ヵ月移動平均の前月比でみると、11月+0.1%、12月+0.1%、1月+0.8%となっている。

一方、2月の鉱工業出荷(季節調整済み、前月比)は、前月(-1.6%)に続き0.9%の減少を示し、原計数の前年同月比も+4.6%にとどまった。各財軒並み減少したなかで、非耐久消費財(紙、合成樹脂製品)の落込みがやや大きく、そのほかトラック、家電製品、鉄鋼等も続落した。なお、出荷の動きを3ヵ月移動平均の前月比でみると、11月+0.4%、12月+0.3%、1月+0.9%となっている。

この間、2月の鉱工業製品在庫(季節調整済み、前月比)は、+1.6%(前月+1.1%)と引き続き増加傾向をたどり、製品在庫率指数も114.2(前月111.4)に上昇した。もっとも、製品在庫の3ヵ月移動平均の前月比では11月+3.2%、12月+1.6%、1月+1.3%と増勢はひとところに比べやや鈍化ぎみにうかがわれる。

設備投資の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、前月比)は、1月-1.3%のあと2月も0.8%の微落を示した。一方、先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み、前月比)は、前2ヵ月増加のあと2月には電力の反動減などから減少した。

労働関連指標の動きをみると、2月の常用雇用

(全産業、季節調整済み、前月比)は -0.3% (1月 -0.1%)と引き続き微減し、一般求人倍率(季節調整済み)も1.22(1月1.25)と低下しており、企業の雇用態度の慎重化がうかがわれる。賃金(全産業)の伸びも、2月には前年同月比 $+16.7\%$ と前月($+18.4\%$)より低下した。

2月の全国百貨店売上高は、前年同月比 $+19.3\%$ (1月 $+21.7\%$)と高い伸びを示したが、兼営不動産部門売上げを除く実勢では、増勢は若干鈍化きみとなっている。

卸売物価、消費者物価とも統落

最近の商品市況をみると、銅が海外市況の回復を映じて騰勢を続け、石油製品も原油価格の上昇から値上がりしているが、綿糸、合繊をはじめ、紙、合成樹脂、木材、砂糖等弱含みの商品が多く、総じて軟弱な基調が続いている。このような市況の低迷は、春需期入りにもかかわらず、実需が依然として伸び悩みを示しているためで、そのほか期末関係からメーカー、問屋筋の売り圧力が強かったことも響いている。もっとも、最近に至り鉄鋼が下げ渋りを示しているほか、紙、塩ビ等では市況対策を強化し、製品値上げを打ち出す動きがみられる。

2月の卸売物価は、石油・石炭製品、金属製品が統騰、食料品、化学品も反騰したが、鉄鋼、紙・パルプ・同製品、木材・同製品等の値下がりから総平均では前月比 0.2% の統落(前年同月比 -0.2%)となった。3月にはいつてからも、上記のような商品市況を映じて、上旬は前旬比 -0.1% 、中旬保合いと引き続き落ち着いた推移を示している。

一方、消費者物価(東京)は、2月に前月比 0.4

$\%$ 下落したあと、3月(速報)も野菜、生鮮魚介等食料の値下がりを中心に 0.2% の統落(季節商品を除く総合では $+0.1\%$)を示した。なお、45年度平均の前年度比上昇率は 6.9% と44年度(6.6%)を上回ったが、45年平均上昇率(7.2%)に比べれば若干ながら低下している。

銀行貸出の大幅増勢続く

3月の金融市場では、銀行券は月中501億円の発行超(前年同1,067億円)となり、一方、財政資金は外為会計が2,907億円の大幅な払超を示したほか、公共事業関係費などの年度末支払がかさんだため、月中では3,065億円の払超と前年払超額(2,680億円)を上回った。この結果、月中ではかなりの資金余剰を生じ、本行は短資業者に対する政府短期証券の売却などにより調整を図った。4月も一般財政の支払増や外為会計の払超を主に、金融市場では大幅な資金余剰を生ずることが見込まれている。

上記情勢を映じて、コール・レートは2、3月と保合いに推移したあと、4月1日には各条件物とも一律 0.5% の低下をみ、42年秋ごろの水準にまで下げもどした。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は、2月 16.4% のあと、3月は 15.5% とやや低下した。一方、預金通貨(平残)の前年比増加率は、昨年12月の 18.0% を底に1月 18.3% 、2月 19.6% とすだいに水準を高めている。

2月の全国銀行貸出は、都市銀行、長期信用銀行を中心に月中4,533億円増、前年同月比 $+61.3\%$ と引き続き顕著な増加を示し、貸出残高の前年同月比伸び率も 18.0% (1月 17.6%)とさらに上昇した。一方、中小企業金融機関では、相互銀行の貸

出はほぼ前年並みながら、信用金庫の貸出は取引先中小企業需資の落ち着きなどから増勢鈍化を続けている。

企業の資金繰りをみると、既往設備支払要資の大きい大企業などでは繁忙感が依然残っているが、回収条件悪化に伴うつなぎ需資はほぼ一巡傾向にあり、一方、金融機関の融資態度はようやく積極みを帯びてきていることから、需資の充足率はしだいに高まり、手元流動性の回復をみる向きもふえはじめている。かかる状況を映じ、久しく低調を続けてきた全国銀行実質預金も、2月には月中4,120億円増と前年同月の約5.1倍の著増を示した。なお、2月の全国銀行貸出約定平均金利は月中0.009%の低下となった。

公社債市況は、都市銀行の売り手控えが続いているうえ、官庁共済組合、地方銀行などの買い意向が強いことなどから堅調に推移している。この結果、新発債の応募者利回りと既発債の市場利回りとの間の乖離はかなり縮小をみるに至った。株式市況は、3月も通月じり高を示した。なお、このところ公社債市場、株式市場を通じ外人投資の増加が目だっている。

国際収支は大幅な黒字

2月の国際収支は、貿易収支が輸出の好伸を主因にかなりの黒字(383百万ドル、前月赤字4百万ドル)となり、また長期資本収支も対日証券投資の増大や外債発行などから久方ぶりに流入超(95百万ドル、前月流出超193百万ドル)を示したため、総合収支では389百万ドルの大幅黒字(前月赤字309百万ドル)となった。外貨準備は、2月中336百万ドル増加のあと、3月も貿易収支の好調

持続などから月中590百万ドルの著増を示し、月末残高は5,458百万ドルとなった。

2月の貿易収支を季節調整後の前月比でみると、輸出が+4.4%(原計数の前年同月比+21%)と引き続き相当の増加を示した一方、輸入は1月減少(-1.3%)のあと1.2%の増加(原計数の前年同月比+11%)にとどまったため、月中の黒字幅は502百万ドル(前月442百万ドル)と、はじめて5億ドル台に乗せた。

輸出の好調は、船舶が著増したうえ、自動車、オートバイ、合繊織物等が増勢を続けたためで、地域別には、米国向けが前2ヵ月著増の反動から伸びが低下したが、西欧・中南米向けがかなり増加し、東南アジア向けも繊維品、船舶を中心にまずまずの伸長となった。先行指標である輸出信用状接受額(季節調整済み、前月比)は、2月に+2.0%のあと3月は+11.2%(原計数の前年同月比+37%)と、米国スト備蓄買いの鉄鋼をはじめ自動車、電気機械等を中心に著増した。

一方、輸入では、事務用機械、原油、航空機等が増加したものの、鉄くず、銑鉄、非鉄金属鉱・地金、羊毛等は引き続き前年を下回り、これまで高水準を続けてきた鉄鉱石も伸びが鈍化した。2月の輸入承認額(季節調整済み)は、前月航空機の集中から著増したことの反動もあり、前月比-14.8%(原計数の前年同月比+5%)と大幅な減少を示した。生産活動の鎮静に加え、輸入素原材料在庫率が比較的高いことなどからみても、当面輸入の落ち着き傾向が続くものとみられる。

(昭和46年4月2日)